

しづみやきに耳をすまます

大震災1週間 阪神の教訓生きる

不規則に停電を繰り返す東京の自宅を出て、電源を求め場所を変えながらこの原稿を書いている。

筆者は阪神大震災で実家が被災し、末妹を亡くした。2日後に自転車をかきつき、兵庫県西宮市から神戸市の避難所に入った。しかし二次災害である津波が激甚だった今回の東日本大震災にかんしては、こうした体験だけからでは語り尽くせないと感じている。

その限りで述べさせていたのだが、この1週間の経過については阪神大震災の教訓が生かされていた。被災地では、必要な事柄が場所により時によりくると変わる。直後にはあんなにありがたかったおにぎりが、じきに飽きられる。

一般のボランティアは、現場で食事を調達できる程度まで復旧が進まなければ、役に

立ちたい一心で駆けつけてもむしろ足手まといになる。そこで今回は、各団体の管理者が現地を視察し、ボランティアにしっかりと働いてもらえるよう配置場所や仕事内容の指示を出すまで待機することが徹底されたようだ。

それでもなお、遺体を茶毘に付すための施設が足りなかったり、避難所にも燃料や食料が不足したりしている。それほどまでに状況は深刻である。

大災害においては、被災者に同情したくとも心情を押し量れないことが多々ある。

「なぜ、娘が死んだのに私が生き延びているのか」と自分を責める母親がいる。筆者の母も震災後にそう言い続け、縊死してしまった。心情を酌み取れず「がんばって、残された孫を育てましょうよ」と励ましたことを、筆者はいま

も悔やんでいる。今回は津波災害が重なっただけに、さらに苛酷な心情を抱える被災者が多いと想像し

ている。接することができたなら、「分かったつもりにならない」ことを肝に銘じて、問わず語りに出るつづみや



松原隆一郎
社会経済学者

まつばら・りゅういちろう
1956年、神戸市生まれ。東京大学教授。08年から2年間、本紙「論壇時評」を担当した。著書に『日本経済論』『金融危機はなぜ起きたか?』など。

城にしても耐えられるよう燃料や食料を買いだめたりしている。政府は買いたたけを批判しているが、信頼を裏切られたと感じる人にとっては、むしろ合理的といえよう。現状では、専門家にとって分かる説明よりも、素人の臆に落ちる解説が求められている。

福島原発については、政府が作業員にかんし被曝線量の上限を従来計100ミリシーベルトから同2500ミリシーベルトに引き上げたという15日の報道が、この上なく重い。

それほどの危機に陥ったと政府が判断したこともさきながら、オール電化生活さえも享受してきた我々の選んだ政府が、自衛官や警察官、消防士ら直接原発に携わったのではない人々に対しても、生命の危険を賭し放水することを命じたのだ。

主権者が現場作業者に生命を賭すよう命じた例は、歴史に満ちている。しかしそれが主権在民の世でも起きることになり、そして関係者たちの酌み取りがたい心情についても、私たちは思いを致す宿命を負ったのである。



避難所生活を送る東日本大震災の被災者たち。寒さをどうしのぐかも課題だ=16日、宮城県南三陸町、西畑志朗撮影

http://www.miyako-odori.jp/

車いす通訳御新・数橋御新